

平和のカタチ

沖縄県立首里高等学校三年 與那嶺 汐音

私は今、生きている。照り輝く太陽の元どこまでも広がる青い海、三線の音色が響く沖縄で。家族や友達と笑い合いながら。そんなのどかなこの島で起こった七十四年前の惨劇を私達は忘れてはならない。

これは私の祖父の話だ。祖父は戦争当時十歳、両親と四人の妹と祖父の七人家族だった。祖父の生まれ育った現在の西原町である西原村は首里を守る最前線とされていた。とつたりとられたりの激戦区でその様子は他府県でも連日報道される程だったそうだった。祖父の家族も避難し壕を転々としていた。そんなある日、祖父はケガをした従兄弟の様子を見るため隣の壕へ行つた。そこから元の壕へ戻ろうとしたその時、祖父の母つまり私の曾祖母の叫ぶ声が聞こえた。「今は危ないから入ってくるな。伏せて動くな。」そう叫んだのは壕に戻ろうとする祖父に向かって壕の中にいた日本兵が銃口を向けていたからだ。上空にいる米軍戦闘機に壕の入口が見つかからないように祖父ごと殺そうとしたのだ。自分達を守ってくれろと思っていた日本兵にまで命を狙われる。自分を守るなら他者の命がどうなろうと厭わない、そんな状況だったのだ。祖父はこの戦争で妹四人と父を失った。祖父は次は自分の番かもしれないと感じつつも、まだ「死」という概念をはっきり理解できなかったという。「にいに痛い。」と言って息を引き取った妹も明日の朝になればまたいつものように起き上がってくるのではないかと思つたそうだ。戦争は兵器は人を選ばない。死を知らない幼い子供でさえ巻き込んでしまう。相手が子供であろうと老人であろうと容赦しない。しかしそれを作ってしまったのもまた人間なのだ。

戦争は人を傷付け、奪うだけだ。豊かな自然を家族や仲間を、そして笑顔でさえも。逃げ歩いてる時にも隣で喋っていた人が流れ弾で命を落としたり、前方を歩く人々が砲弾の爆発でいつの間にか姿が消えている。死体が転がっていること、銃声や爆弾の音が鳴り轟いていること、泥水をすすることそうした非日常が当たり前と化していったのだ。いつ自分だって命を落とすかわからない。その状況を生きていたのだ。

まさに生きてままの地獄だといえるだろう。

私はこれまで何度も平和学習を受けてきた。しかし祖父の話も聴いて戦争というものをより身近に感じた。そしてある一つの疑問が頭に浮かんだ。それは平和のカタチはこれでいいのかという事だ。私達の生きる今はたしかに祖父の幼かった時代に比べて平和になったといえるだろう。だが、本当に現在が理想の人々が追い求めていた平和だと胸を張って言えるのだろうか。私達は小さい頃から様々な平和学習を通して戦争はいけない、平和が大切だと学んできた。ただその戦争は過去のものだと捉えてはいないだろうか、たしかに今現在、日本で戦争は起きていない。しかし、世界全体に目を向けてみるとどうだろう。未だ多くの紛争が起こっている。また、日本にも大きな問題はある。虐待、過労、いじめ、差別、人が人を傷付け、時に死に追い込む事件が後を絶たないのだ。私達は本当に平和の価値を理解しているのか。今ある当たり前慣れすぎてはいないだろうか。私達は「戦争」を情報として受け入れるだけでなく、平和な世をつくるためのもう一歩が求められている。その一つとして私は人や物を大切にすることを挙げる。様々な技術が発展している今日、SNSなどで多くの人とつながりを持つようになった。随分簡単にやり取りができ、情報を発信できる。だからこそ言動や行動にはより責任を持たなければならぬ。悪気はなくても相手にどんな伝わり方をするのかよく考えてから行動するべきだ。また自分と違うからといって相手を否定するよりももっと相手と向かい合う方が良い。たしかに自分と違うものは怖いだらう。でもそれは相手を知らないからだ。そのためにも話し合っって色々な考えを取り入れる事で新たな発見があると思う。人に対してだけでなく物に対しても大切にすることは必要だ。何でも手軽に手に入るといって乱暴に扱ったり、すぐに捨ててしまふのではなく次の世代に資源を残すためにも大事に扱うべきだ。物も自分を含めた命を雑に扱ってはいけない。

私達はこれまでを生き抜いてきた人達をつくった世界で生きている。私達の生きている今日は誰かの生きたかった明日だったかもしれない。今ある幸せに気付き、自分の好きを自由に表現できる社会、皆が互いを認め合える世界になった時、新たな平和のカタチが見えてくるのではないだろうか。